

二 大幸キャンパス ― 医学部保健学科・大幸医療センター

◆ 臨時附属医学専門部と医学部附属医院分室

鶴舞キャンパスとともに、医療関係施設が集中しているのが、医学部保健学科・大幸医療センターのある大幸キャンパスです。両者の設置は比較的最近で、また小さなキャンパスでもあります。その歴史は古く、大幸医療センターは一九四三（昭和一八）年にまで遡ることができません。

前述したように、名帝大医学部は一九三九（昭和一四）年に、名古屋医科大学を母体に創設されました。しかし当時は戦時中であり、軍医の需要が急増しているにもかかわらず、軍医は不足していました。そのため、最小限必要な医学知識をもっている軍医の短期養成機関として「臨時附属医学専門部」が、医学部のある全国の主要大学に設置されました。名帝大での設置は、医学部創設直後の同年五月でした。施設は医学部の講義室を共用し、臨床実習は名古屋市内の病院に依頼して急場をしのいでいました。

専門部は高まる軍医需要に応ずるため急速に拡充が続き、一九四三（昭和一八）年までに次々

と専門部専用の新営建物・施設が木造ではありましたが建てられていき、また職員の増員など組織的にも整備されていきました。また同年には名古屋市中区在住の陸田しようさんから、同区新栄町（現中区新栄二丁目）にあった陸田ビルの寄附をうけ、専門部の診療病院として利用することとなりました。これをうけて、同年九月に医学部附属医院分室が、寄附された陸田ビルにおかれました【図9上】（次頁）。

翌年四月には専門部は「附属医学専門部」と改称し、七月には先の医学部附属医院分室が廃止され、かわりに医学部附属医院分院が同じ場所に設置されました。

◆専門部の廃止と分院の改組

しかし敗戦になると、専門部は一九四六（昭和二一）年度から生徒募集を見合わせ、最後の学生が卒業した一九五〇（昭和二五）年三月に自然廃校となりました。そのため残った医学部附属医院分院は、それまでの専門部の臨床実習病院の性格を改めざるをえなくなり、組織機構を改革、医学部の第二臨床附属病院として再スタートをきることになったのです。そして一九四九（昭和二四）年五月の新制大学への移行に伴い、医学部附属病院分院と改称されました。

その後分院は、名古屋市都市計画の区画整理のため、一九六一（昭和三六）年九月に東区東門前町（現東区東桜二丁目）に新病院を新築、陸田ビルから移転しました【図9下】（次頁）。



【図9】(上) 1926年頃の陸田ビル (下) 1962年頃の東門前町医学部附属病院分院
(名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵)

◆医療技術短期大学の設置（大幸キャンパス）

昭和四〇年代になると、分院においても患者数が増加し、それに伴い外来や病室が手狭になり、また施設も老朽化したため分院の移転が、本格的に検討されるようになりました。そのような状況下にあつた一九七〇（昭和四五）年四月、愛知教育大学名古屋校の大学部が、刈谷市の新キャンパスに移転したため、その跡地に分院を移転しようという動きがおこりました。交渉の結果、一九七五（昭和五〇）年七月に正式に名古屋大学の所管となり、名古屋大学の第二のメディカルキャンパスとして現在の大幸キャンパスとなりました。一九七七（昭和五二）年には医療技術短期大学部が設置され、旧愛教大の改修校舎を利用することになりました。医療技術短期大学部は、それまであつた医学部附属の看護学校（二八九四（明治二七）年設置）・助産婦学校（同年設置）・診療放射線技師学校（一九五五（昭和三〇）年設置）・臨床検査技師学校（一九六一（昭和三六）年設置）の四つの付設学校を統合したものでした。さらに一九七九（昭和五四）年七月には新病院が完成、分院がここへ移りました。

その後、一九九七（平成九）年に分院は大幸医療センターとなり、また翌年医療技術短期大学部も廃止され医学部保健学科となり、現在に至っています。